

# 母権論（連載第十三回） エジプト（九）

## 第九章

かくして我々は、カンダケ神話が史実及び西南アジア諸国の太古の伝承と一連の特徴に關してつながつてゐることを認識し、至るところに原初母権制の思想を見いだした訳だが、アレクサンドロスとカンダケの間で行われたような鬪いの本質もまた、その思想と現象形態においては、シバの女王とイスラエルの強大で輝かしい支配者（ソロモン）とのあの出会いと同様なのである。彼女は謎と謎の網でソロモンを試す。そしてその答によつて、あまねく褒め称えられた君主の知恵を認めた彼女は、そこで初めてかくのごとき支配者を王座に戴く民の幸運を讃えるのだ。広く知れ渡つた名声、自らの眼前に繰り広げられる栄光と榮華によつては、彼女は王とその神の偉大を承認することはない。ただひとえに卓越した精神の崇高を目の当たりにして、彼女はより高次の存在を認め、その前で喜々として身を屈するのだ。カンダケも然り。彼女とマケドニア王との間に生ずる鬪いは、かつてのディオニュソス、ベレロポン、ペルセウス、テーセウス、アキレウスといった偉大な女性征服者たちのそれとは違つて、武器をもつてして雌雄が決せられるのではない。その鬪いはむしろ精神の領域を戰場とし、知恵と「洞察力（羅）」という王冠を求めて行われるのである。

ヨハン・ヤーコプ・バッハオーフェン  
三浦 淳・桑原 聡 訳

この鬪いの経過を観察するのは、実に興味深いことだ。それは王宮内の隠された居室を王が訪れた際に展開する。アレクサンドロスが王宮の壮麗さを目の当たりにした印象を隠そうとしつつも、思わず漏らした最初の言葉が、カンダケを驚かす。「女王はその男の天賦の才を悟り賢明にも認める。〔羅〕」優越を示すのは今度は彼女の番である。そして彼女は王に本当の名で呼びかけ、彼の肖像を見せる。世界の征服者は女の賢さに圧倒される。鬪いは決したかのように見える。勝利を感じつつ女王は今や嘲笑の言葉を投げかける。「汝のかの名高い知恵はさてどのようによつて助けてくれるのか、汝よりもさらに企みにたけたカンダケを目の当たりにしている今。〔羅〕」だが勝利の棕櫚は彼女のものとはならない運命である。王を「謎めいた知恵〔希〕」で絡め取ることは、なるほど彼女にはできた——「女というものは奸計を見いだしたがるものだ。〔希〕」——「もつとも賢い女たちはすべての事柄に奸計を見いだそうとしまつた編み出そうとするものだ。〔希〕」——しかし彼の命を助けることは彼女の力の及ばないところである。秘密保持や、ベビュルキア人への懲戒を引き合ひに出したところで、ポロスの死に対するコラゴスの復讐心を宥めることはできない。かくして、女が途方にくれている中で、アレクサンドロスに光彩陸離たる自らの知性が無限に豊かであることを示す機会が与えられるのである。このゴルディオスの第二の結び目に対し

て彼が用意する解決法は格別の注目に値する。王自らを彼女の手  
に渡すという約束に対して、そのような行為に報いるというコラ  
ゴスの約束がなされる。すなわち一方が果たされると他方に矛盾  
してしまふという二重の誓約なのである。アレクサンドロスが殺  
されれば、コラゴスは約束を破ることになる。彼の命が助かれば、  
アンティゴノス（ここでアレクサンドロスはアンティゴノスを名  
のつている。第八章参照）の約束は意味を失う。この解きがた  
い矛盾、「困難な状態〔希〕」という言葉は、その意が弁証家た  
ちによれば（間違つた約束〔希〕）と説明されるような問いのこ  
とである。したがつて我々が真であることと決するであろうものはな  
んであれ、偽であると判明する〔羅〕<sup>⑧</sup>という法学者アフリカヌ  
スの説が適用されるこの矛盾が、ここでその發明者を救うのだ。  
彼はここにおいて、古代の人々によって特筆されている自らの哲  
学の素養を發揮してみせたのである。瞞着によってではなく、た  
だ自らの精神の力によって、アレクサンドロスは敵の憤怒に勝利  
する。カンダケは王の作つた結び目の見事さを理解し、最初は密  
かにこしらえた肖像の助けを借りて征服者の外見を見分けたよう  
に、今度は彼のより高次の本性を知るのである。彼女は彼に罫を  
しかけたのだつたが、いまや彼女は自らの罫の威力がより高次の  
罫によって挫かれたのを悟る。以前の謎はそれに対抗するもう一  
つのより力強い謎によって効力を失う。この新しい謎はその源と  
解決をアレクサンドロスの精神そのもの持っている。知恵比べ  
はこうして終わる。劣勢の者〔アレクサンドロス〕が勝利を収め  
たのであり、女王には新たに彼を支配しようという一縷の望みも  
残らなかつた。カンダケは驚きのあまり声を失う。自らの敗北に  
よつて憎悪の感情あるいは脅迫に走ることからほど遠く、彼女  
は王自身と母子関係によつて結ばれることを願ひ、彼を通して自  
らの力では達成できないことを、すなわち世界支配を実現したい

と願うのだ。

闘いのこの結末は、女性支配を制圧した英雄たちとアマゾン  
との遭遇が至つた同様の結末を想起させる。敵意は最後には友愛  
に変わる。乙女たちは敵であることをやめ、自らを征服した男た  
ちの熱烈な賛美者となる。ディオニュソスによつて屈服させられ  
た女たちは、今度は彼のために勝利を勝ち取るのだ。というのも  
彼女たちは彼のうちに女を救済する者を認めたからだ。カンダケ  
も然り。最初は敵であつたものが、最後には王の熱烈な讚美者と  
なり、王を無傷で帰還させ、自身王を息子に迎えたいと願うので  
ある。だがこの場合、賛嘆と好意を呼び起こすのは男の壮麗なフ  
ロスではなく、精神の光輝である。知恵において王と女王は張り  
合い、精神の領域で男の最終的勝利は決する。女自らが、男の前  
に立つて初めて見えてきた高次の光を喜ぶ。カンダケはその如才  
なさによつてこの英雄を没落させようとしたが、アレクサンドロ  
スのさらに優れた英知は救済をもたらすのだ。女は死をもたらず  
が、男は精神によつてそれに打ち勝つ。女に源を持つ物質的生の  
深い謎は、純粹な「理性〔希〕」に発する高次のそれによつて解  
かれる。欺瞞は感覺的存在の低き領域にとどまり、精神の領域に  
上ることはない。前者にあつてはすべてが永遠の変転、永遠の迷  
妄のうちにある。後者にはあらゆる奸計をあざ笑う勝利がある。  
女は感覺的存在の死の運命を、男は精神によるその超克を代表す  
る。オイディプスの謎解きを眼前にしてスフィンクスがおのれの  
出自たる深淵へと身を投げるように、夜に輝き形を変える月が昼  
の天体たる太陽の永遠の光輝に会つて身を引くように、カンダケ  
は、シバの女王同様に、自らの前に輝き出でた光によつて、そし  
て自らもそうと認めた高次の光によつて無へと引き戻される。賢  
いといふ彼女の名声は、男の知恵という、より強力な、女の奸計  
を白日のもとにさらす光を前にして色あせる。アレクサンドロス

はいまや即座に自らの不死性を承認され、今後は神にも似て女不要の身となることを約束される。この展開全体の内的連関は見誤りようがない。カンダケに対してアレクサンドロスは自らの精神の知恵を実証したのであり、女の克服者として、したがって肉体的存在と物質的没落との精神的克服者として現れたのだ。これによつて彼は不死性を獲得する。それは、サラピスが彼に約束しようとはしない肉体の不死性ではなく、女との共生を排除する精神の不死性である。<sup>五</sup>

## 第九章

神のこのような啓示ののち——この物語はかくして結末に至るのだが——アレクサンドロスはカンダケの王冠と、女王から与えられた支配のしるしとを携えておのれの軍勢のもとに帰還する。ここで再び記述が母権の立場に戻っていることが読みとれよう。アレクサンドロスその人が王冠となべての権力を女から導き出しているのであり、この女は息子にとつては母であるが故に支配権の源となるのだ。王〔アレクサンドロス〕がカリア人女性アダをおのれの母と見なして好意的に迎え、自分から彼女に息子の称号を所望したように、カンダケとの場面でも彼は彼女の手から王冠を受けることを拒まない。偽カリステネスはこの立場をさらに堅持し続ける。写本Cの校訂版にはアレクサンドロスが母オリュンピアに宛てた手紙が一通収録されているが、この中で王は自らの死が回避し得ないことを確信しつつ、側近が信頼できないとして次のように嘆いている〔三・三三三〕。

「私は女王カンダケから解放され、女王は私に厚意を示して私の母として振る舞ったのです。この真に偉大な女性は私の与えた

小さな恩恵に対してきちんとした報いを示してくれました。すなわち私は、彼女の息子カンダレウスをその妻、その財産及び軍隊と共にベブリュキアの僭主エウアグリデスの手から救出してやったのです。それで敵方のこの女性ですら私の若さに憐れみを覚えたのでした。これに対して、母上、私の恩恵に浴してきた部下たちは、私を無慈悲で残酷な死へと至らしめようとするのです。私が天からの啓示によつて世界を支配してから、彼らは私が祖国に帰ることを認めようとしません。〔希〕」

ここではカンダケの母としての本質が評価され、その本質に基づいたアレクサンドロスへの報い方が、マケドニア人兵士の忘恩と対比させられている。カンダケは、この戦闘的ではあつても真に高貴な女は、アレクサンドロスのわずかな善行に報いるすべを知っていた。これに対し、彼の事績をつぶさに見てきたマケドニア人兵士たちは、「天からの啓示によつて〔希〕」彼がそれを成し遂げたのを認識できなかった、というのである。

この言い回しがどれほど恣意的に見えようとも、その中には歴史の真実が表現されている。アレクサンドロスは女に対して精神的な勝利を収めたが、女性的物質的な原理に基づくアフリカ土着の思考法をうち破つて男性的アポロン原理に支配権をもたらしことはできなかった。マケドニア人〔アレクサンドロス〕の事績には「天からの〔希〕」精神の輝きが表現され、なべては精神的な力の下におかれることが明示されていたが、彼の事績を見てきた部下たちはここで改めて低次の原理に従属してしまうのである。女性優位という物質的な観念は依然として生きていた。アレクサンドロスが王冠をカンダケの手から受け取り、そうすることで女性の母性原理を権力の至高の源として認めたように、プトレマイオス王朝は土着的なイシス原理に完全に従い、アフリカ古来

